

(様式2)

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（参加学生）

平成24年12月10日

所属：教育文化学部 国際言語文化課程 欧米文化選修 2年

氏名：佐々木 夏海

研修先大学・機関名等（国）： ケニヤッタ大学 （ ケニア ）

在籍身分：

渡航年月日：2012年 9月 1日

帰国年月日：2012年 9月22日

○研修先での学習内容等

第1週目は、マトマイニ・チルドレンズ・ホームという児童養護施設に滞在し、そこでスラムの孤児の子供たちの保護養育やシングルマザーへの職業援助をしている日本人の院長の方のもとで、様々な体験をさせていただいた。現地の生活を肌で感じるだけでなく、実際にケニアで2番目に大きいマザレスラムを訪れ、そこで生活改善の推進に努めている青年団の方々にお会いしたり、またJICAのケニアオフィスに赴いてケニアの現状や日本の支援の取り組みなどのお話を伺ったりすることができた。

第2週目はナニュキに滞在し、TLI（ロールダイガ研究所）という環境保全NGO団体の水谷さんにお世話になった。水谷さんは乾燥地帯であるナニュキの農村で、人々の生活に寄り添い、その生活や考え方そのものを内側から改善していいこうという活動をされていた。今回私たちはその活動を間近で見て、ともに活動し、途上国における村落開発の意義やその大変さを学ぶことができた。

第3週目はケニヤッタ大学に宿泊した。大学では、日本の文化を紹介するイベント『ジャパンフェア』を開催し、多くのケニアの学生と触れ合い、また日本に関心をもってもらうことができた。

○研修期間の生活面について

ケニアでは異文化の体験に驚くことばかりだったが、特に印象に残っているのは1週目にお世話になったマトマイニ・チルドレンズホームでの生活だ。そこでは、ケニアで深刻化されている森林伐採やごみ問題などの環境問題の現状に対して徹底的な環境保全に取り組むことで、子供たちないしはケニア全体へ、“説得力のある”環境教育を施すことを方針に取り入れている。それゆえに、ここでの生活は、トイレは排水をバケツの水で汲んで流す。お風呂はシャワーではなく、大釜で沸かしたお湯を1人バケツ一杯に供給され、全身をそれで洗う。もちろんパン

(様式2)

コンのゲームなどあるわけがないし、日本では毎日のように触っている携帯電話も使えない、といった日本とはまるで違う生活だった。人間として必要最低限の質素な生活に、最初こそ不安でいっぱいだったが、慣れてしまえば、その至って“人間的な”生活が体に染み込み、まったく苦ではなくなった。むしろあたたかいお湯をあびることや、子供たちと走り転げて遊び回ることが楽しみで仕方なくなっていた。マトマイニでの生活やスラムへの訪問は、5人全員が「幸せってなんだろう」ということを深く考えさせられるものとなった。

○研修期間全般にわたる感想

今回の旅では、私たちは最貧層から富裕層まで、さまざまな階級の暮らしを見てくることができた。その中で印象に残ったのはやはりスラムの体験である。1日1ドル以下での貧しい生活を送る人々が身を寄せ合って暮らすスラムの人々は、私たちの意に反して、生命力に満ちていた。衛生的で便利な生活とはかけ離れた生活環境の中で、互いに助け合いながら、生き生きと笑顔で生活している姿に圧倒された。「貧困」であるということと、「不幸」であるということは、まったく別物なのである。むしろ人を輝かせるのは、必死に伸びていこうとする力なのだと感じた。

この旅を通して確実に世界への見方が広がったと思う。実際に世界へ出てみて初めて気づくことが多くあった。そして自分の未熟さや知識の狭さを思い知った。もっと知らなければならぬことがたくさんある。もっと触れてみたいことがたくさんある。これから何度もこの旅を振り返り、もっと勉強して自分なりにたくさん考えようと思う。ケニアのこと、日本のこと、子供たちの未来や、世界のこと。幸せとは何かということ。今はまだ答えは出ていないことだらけだけれど、忘れないで考え続けることが大切なのだと思う。

○今後の勉強計画

今回のスタディーツアーでは、この報告書にはとても書ききれないほど多くの学びと感動があった。しかし私たちの見てきたものは、ケニアという1つの国の、たった一部の側面でしかない。この旅を通して、自分の見識をもっともっと深めたいと思ったし、アフリカという可能性にあふれた土地に今まで以上に惹きつけられた。この体験をきっかけにして、もっと勉強して異文化理解を深め、国際交流の幅を広げていきたいと思う。